

写真家、新山清展にちなんで写真トーク

9月17日、新山清写真展の開催にちなんで、文化ギャラリーで同氏作品と昭和の時代背景、白黒写真技術などを語る写真トークが開かれました。同展に合わせて来町した長男、洋一氏(67)(東京都在住)と写真友から2人目、グラフィックデザイナー、水木喜美雄氏(同)、日本プリンター協会前会長の加藤法久氏(同)、町内在住の写真家、渡辺信夫氏らが出席して、新山氏の作品、作品背景、現代写真から見た新山作品の技術的評価などの功績を語り合いました。



新山氏は、1969(昭和44)年、58歳で死去。生前はごく数年間のプロ活動を除いて作品発表が少なく、未発表の白黒フィルム作品が遺作として数多く残されていたという事です。洋一氏によって遺作が積極的に紹介されるようになり、再評価されるようになったようです。

この日写真トークに出席した加藤氏は、翌18日から3日間、町内で初の「モノクロプリント・ワークショップ」講師として、国内最高峰といわれる暗室技術を受講者に伝授しました。

長寿祝ってびだまりの里で敬老会

「敬老の日」にちなんで、9月18日、町内の老人保健施設、特別養護老人ホームでそれぞれ、長寿を祝って1日早い敬老会を開きました。老人保健施設「ひだまりの里」(本村勝昭施設長)では、80人のお年寄りが楽しいひと時を過ごしました。



員出演の演芸ステージ舞台を楽しみました。この日のお待ちかねは、職員出演の二人羽織り。2人が一組になって、ステージでそばを食べたり、ケーキを食べたり…。でもどちらもうまくいきません。唐辛子いっぱいのそばを食べてむせ返ったり、デザートのカレーを食べようとして生クリームが顔にべったり…。会場のお年寄りからは、おなかを抱えて大きな笑い声が沸いていました。

売り出し好評！待ってた、新米キャンペーン

東川産の新米を町内にPRする新米キャンペーンが9月17日から20日まで4日間、行われました。町内4カ所の引き渡し所には、新米「ほしのゆめ」の販売開始を待っていた皆さんが朝から訪れました。道の駅・ひがしかわ道草館横の特設テント

引き渡し所にも事前予約の皆さんが次々と訪れ、20kg入り5袋、6袋と一度に買い込み、その場で宅配発送をする方も大勢。敬老の日を挟んで今年の3連休はあいにくの雨模様でしたが、連休を利用して観光に訪れた本州観光客の中には、

予約なしでは買えないことを知って「残念！なんとか買えないの？」と食い下がる姿も。今年の新米キャンペーン申し込み数は930件、延べ2万7千600kg。昨年より約100件、4千135kg増となりました。



五輪銀メダリスト、中村真衣さん、東小で夢の教室

9月1日、東川小学校にシドニーオリンピック日本代表選手で水泳銀メダリスト(女子100m背泳ぎ)の中村真衣さん(32)が来校して自分の夢を目指す大切さを伝えました。(財)日本サッカー協会(東京)で開いている「夢の教室」の先生として来町しました。



スイミングスクールで水泳を始めました。中学校3年生になって日本水泳選手権大会の女子100m背泳ぎで初優勝。そのときに将来はオリンピック出場を！と具体的な目標をしっかりと持つことでアトラクタ五輪(1996年)出場を果たし、続くシドニー五輪(2000年)で同種目銀メダル、女子400mメドレーリレー銅メダルを獲得しました。

「夢の教室」で来町した夢先生は、マラソンランナーの千葉真子さんに続いて2人目。中村さんは4歳の時から長岡市内の児童は体育館でグループを作って協力しながら目的を達成するゲームなどを通して、チームワークの大切さを学びました。

日本の中央政治の今を語る―田勢康弘氏が来町



9月19日、町が主催して農村環境改善センターでコラムニスト、田勢康弘氏の講演会を開きました。「野田佳彦政権と日本の将来―危機脱出の鍵は地方が握る」と題して話しました。

田勢氏はテレビで放送中のニュース解説番組でホストを務めるなど活躍しています。福島原発事故、中央政界の観測、ギリシャの財政赤字を発端とするヨーロッパと円高、沖縄米軍基地移転問題など、多岐にわたるテーマに触れ、今後地方の活性化のためには「日本の特徴はすべてのものが中央を向いていること。中央を頼るといふ発想を捨てることから始めなければならない」などと持論を展開しました。町内ばかりでなく、周辺の市町からも聴衆が訪れ、広い視野からの論旨展開に耳を傾けました。

高品質の米出荷を―と水稲生産者総決起集会

9月8日、東川町農協は同農協で「東川米」全水稲生産者総決起集会を開きました。3年ぶり豊作への期待の声が高まる中、今年の水稲出荷に万全の態勢を―というもの。町内の稲作農家ら約150人が出席しました。ホクレン農業協同組合連合会旭川支

所、上川農業改良普及センターからも担当者が出席。ホクレンは、本年産米の需給環境、販売状況の予測などを示しました。その中では、今年が茨城、福島をはじめ東北各県からの集出荷状況、販売動向の予測がつかないこと、昨年品質不足だった新品種「ゆめびりか」のブランド化に向けて一層の作付

強化の必要性などの説明がありました。同農協では、東川ブランド米の浸透ぶりと本年産米の集出荷態勢などを改めて説明し、農協集出荷態勢の確立を訴えました。

